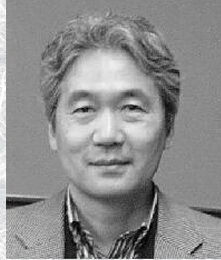


# いま、現代文とは

—評論教材の新しいあり方を目指して



岩崎昇一

(三省堂国語教科書編集委員)

不易流行の中で〈編集会議〉

現代社会のさまざまな問題群の海中にどっぷりと浸かる。「現代文」教科書編集とはそういう仕事である。改訂のため

の〈候補教材〉が投げ込まれる。ひたすらに読む。教材としての価値・意義付けが議論される。ふたたび新しい〈候補教材〉を渉猟する。締め切りまでほぼ継続的にそんな生活が続くのだ。

切実なテーマに優劣は付けがたい。会議の議論も白熱する。編集委員もまた現役の教師である。ゆずれない主題やこだわりの事実もある。鋭利な教材の〈読み〉が提示されると、その〈読み〉に触発されて真摯な反論も諧謔もとびだす。熱くなる議論に嫌気がさして変にバランスをとる嫌みな人(私)もいる。テーマをかせえ攻守をかせえ、相互に触発されながら編集会議は議論を深める。

むろん、現代の〈流行〉のみを追うだけでは「教科書」は成立しない。「現代文」(広く近代文)の古典ともいえる作品群〈不易〉にも、今だからこそ読ませたいという教材の発掘にも周到に眼を配っている。詩歌については、全体として近・現代詩歌史が見通せるよう作品が配置されている。

教材採録にあたって、現行二冊の『現代文』で定評のある「評論教材」には一層の充実を図った。多様な価値観の錯綜する現代社会にあって、対象を批判的に把握する実力を養成することがいっそう

大切になってきているとの判断によるものである。とりわけ改訂の目玉となるのは、〈読解教材〉の拡充に加えて、新企画として「小論文課題」を採録したことである。「現代文」の実力を養成すると共に、昨今の大学入試動向に対応するための小論文の実践演習に活用できる。

## 待望の小論文企画〈批評のまなざし〉

小論文には、日ごろの思考や関心の度合いが直接に反映する。また語彙の習得状況から論理の構成能力・説得力に至るまでの総合的な「表現力」を端的にあらわにする。さらに特定の主題について、限られた時間(あるいは制限字数)内で完成せよという「条件」が課せられると、単なる試験偏差値によるものではない「実力」が顕著に問われる。そのためAO入試や推薦入試に、小論文問題は必須の課題となっており、大学進学をめざす高校の授業でも、避けることのできない課題である。

近年の課題小論文のテーマには、グローバルリズム、格差社会、メディアや環境、医療、ニート問題などの社会系問題が多く登場する。これらのテーマについて、単なる感想や好悪を越えて論じるに

は一定の知識が要求される。また、それが衣食住や個人・家族生活に関わるものであっても、「社会問題」として論じることが求められる。

しかし、実際の「国語」の授業で、これらの社会系問題について、賛否を含めた生徒自身の見解が問われることはまれである。一般的には読解や論旨・語句整理、学習の手引きを終えれば、次の単元へと移行する。そのため、現代社会の最先端の状況やテーマを論じた「現代文」に教科書で触れることは少ない。考えてみると、これは極めて不自然だし残念なことである。時事的な「現代文」を読ませたいという要望はかねてより現場にあった。

『現代文』（高等学校・新編）改訂では、そうした現実的要求に応じてそれぞれ四編の「小論文課題」の採録を試みた。『新編現代文』ではⅡ部巻末に、「異文化の中で」（小坂井敏晶）、「現代の若者像」（香山リカ）、「生活者として」（暉峻淑子）、「メディアの現場から」（辺見庸）を配置した。一方『高等学校現代文』では、Ⅱ部の四つの「評論」単元の後にそれぞれ「ノートについて」（鈴木謙介）、「グローバル化の逆説」（小倉和夫）、「カタカナ語は享受すべきか」（川口良・角田史幸）、「『私』消え、止まらぬ連鎖」（高村薫）を置いた。

いずれも読解と小論文課題が設定され、生徒は自己の見解を小論文形式で述べることになる。書く〈主体〉になることで、現代文の読解力や表現力を養成するのみならず、自己と社会との関係を批判的に取り結ぶ契機になるだろう。「小論文課題」は、これからの「現代文」教科書の一つの方向性を示唆する試みとして、使用する学校現場からのご意見に注目したい。

### 改訂『現代文』―拡充の方向性

―『新編現代文』は、多様な学校現場に対応するよう編集されたものであったが、そうした理念を継承しながらも、大幅な改訂を行った。大学受験の実力養成にたえる教科書をのぞむ学校現場の要望に応えるためである。それは随想教材から評論教材への差し替えや小説教材の増加などに顕著にあらわれている。

小説教材は多彩である。少年の自意識の葛藤を描いた小川国男の古典的名作「物と心」をⅠ部の最初においた。続く「ピクニックの準備」（恩田陸）では同世代の登場人物の心理と現代小説の手法を味読させようとの意図である。恩田陸は若い世代に人気の高い作家である。その物語世界にも親近感をもつ生徒が多数い

るだろう。読書への誘いになればと思う。翻訳では「涙の贈り物」（R・ブラウン、柴田元幸訳）を採録した。末期エイズ患者とホームケア・ワーカーとの交流を描いた作品である。既存教材の「聴くということ」（鷺田清一）、「病と科学」（柳澤桂子）とも通じ合う現代的主題を、小説世界を通して考えさせたい。Ⅱ部では、初めての教材「飛行機で眠るのは難しい」（小川洋子）を最初に置いた。おもわず引き込まれてしまう卓抜した物語世界を味読させたい。そうした物語世界と、鋭く対置させようとする意図の下に採録したのが、戦後文学の定番「夏の花」（原民喜）である。「事実」の風化に踏みとどまり、死者への追悼を果たそうとする「私」の〈記録文学〉を、いまこそ改めて読み深めて欲しいとの編集委員の思いが込められている。そして「最後の一句」（森鷗外）で小説教材の最後を締めくくった。

評論教材も充実させた。Ⅰ、Ⅱ部とも前半に評論をそれぞれ三本配置することで新趣向を打ち出した。新教材は、生物史の視点から現代人に警告する「マンモスの歩いた道」（池内了）、環境問題に〈環世界〉という視点を提示する「木の葉と光」（日高敏隆）、現代消費社会の問題性を論じた「『私』消え、止まらぬ連鎖」（高

# 新編現代文

## I部

随想 最初のペンギン（茂木健一郎）

ピカソの力強い「線」（高樹のぶ子）

小説 物と心（小川国夫）

ピクニックの準備（恩田陸）

評論 マンモスの歩いた道（池内了）

恐怖とは何か（岸田秀）

コンコルドの誤り（長谷川眞理子）

詩 海への距離（新川和江）

未確認飛行物体（入沢康夫）

帰途（田村隆一）

短歌 愛を言う君―短歌十二首

（俵万智ほか）

評論 未来世代への責任（岩井克人）

サッカーと資本主義（大澤真幸）

小説 山月記（中島敦）

涙の贈り物

（R・ブラウン／柴田元幸訳）

評論 身体（の）疎外（黒崎政男）

「知る」ということ（加藤周一）

小説 ところ（夏目漱石）

○子どもの権利条約

――条約・法律の文章

## II部

随想 前の駅でました（佐藤雅彦）

聴くということ（鷺田清一）

小説 飛行機で眠るのは難しい（小川洋子）

不揃いなサンダル

（I・カルヴィーノ／和田忠彦訳）

評論 木の葉と光（日高敏隆）

生活のデザインをめぐる（柏木博）

「私」消え、止まらぬ連鎖（高村薫）

小説 夏の花（原民喜）

ギリシア的抒情詩（西脇順三郎）

詩 湖水（金子光晴）

遺伝（萩原朔太郎）

俳句 流水や―俳句十二句（山口誓子ほか）

夢見る力（小栗康平）

評論 病と科学（柳澤桂子）

最後の一句（森鷗外）

小説 私の個人主義（夏目漱石）

○情報の読み方・扱い方

批評のまなざし 異文化の中で（小坂井敏晶）

批評のまなざし 現代の若者像（香山リカ）

批評のまなざし 生活者として（暉峻淑子）

批評のまなざし メディアの現場から（辺見庸）

村薫）である。いずれのテーマも切実でしかも、生徒の関心を引きつける話題性豊かな評論である。また、I部の後半では、サッカーを社会的に考察した魅力的な評論「サッカーと資本主義」（大澤真幸）、監視やセキュリティの問題を身体認識の視点から論じた「身体（の）疎外」（黒崎政男）の新教材二本を採録した。「知る」ということ」（加藤周一）は、評論読解の定番として最後に置いた。冒頭の「最初のペンギン」（茂木健一郎）、「前の駅でました」（佐藤雅彦）の軽妙な随想も新教材であり、国語授業の導入に新しい切り口を提供している。

―『高等学校現代文』の改訂は、一部に留めた。大学進学をめざす学校での採択も多く一定の評価を得ているものと判断されたからである。ただ現場からの声やテーマの斬新さを求める意見にこたえて若干の手直しを施した。

小説教材では、I部小説(一)で「ころ」（夏目漱石）と並べて、「レキシントンの幽霊」（村上春樹）を、また、2部小説(二)では「舞姫」（森鷗外）と並べて、「リンデンバウム通りの双子」（小川洋子）を配置した。これは初めての教材化であり、小説の構成や登場人物の心理を読解させるに適した現代小説である。ま

# 高等学校現代文

## 1部

随想

「市民」のイメージ (日野啓三)  
カフェの開店準備 (小池昌代)

小説一

山月記 (中島敦)  
ひよこの眼 (山田詠美)

評論一

ミロのヴィーナス (清岡卓行)  
ホンモノのおカネの作り方 (岩井克人)

身体像の近代化 (野村雅一)  
○中身当てクイズ―解説文

詩歌

今日 (谷川俊太郎)  
パンの話 (吉原幸子)  
ねずみ (山之口獺)

現代の短歌―短歌十二首 (塚本邦雄ほか)

評論二

現実と仮想 (茂木健一郎)  
動物のことば・人間のことば (野矢茂樹)

小説二

こころ (夏目漱石)  
レキシントンの幽霊 (村上春樹)

評論三

世代間倫理としての環境倫理学 (加藤尚武)

「である」「ことと」「する」「こと」 (丸山真男)  
○情報の読み方・扱い方

## 2部

評論一

聴くということ (鷲田清一)  
判断停止の快感 (大西赤人)

批評のまなざし①

ニートについて (鈴木謙介)

小説一

鞆 (安部公房)  
藤野先生 (魯迅／竹内好訳)

評論二

南の貧困／北の貧困 (見田宗介)  
ある(共生)の経験から (石原吉郎)

批評のまなざし②

グローバリズムの逆説 (小倉和夫)

詩歌

のちのおもひに (立原道造)  
死んだ男 (鮎川信夫)

古諸なる古城のほとり (島崎藤村)  
現代の俳句―俳句十二句 (三橋鷹女ほか)

評論三

場所と経験 (柄谷行人)  
虚ろなまなざし (岡真理)

批評のまなざし③

カタカナ語は享受すべきか (川口良／角田史幸)

小説二

舞姫 (森鷗外)  
リンデンバウム通りの双子 (小川洋子)

評論四

無常ということ (小林秀雄)  
現代日本の開化 (夏目漱石)

批評のまなざし④

「私」消え、止まらぬ連鎖 (高村薫)

た2部の小説(一)「藤野先生」(魯迅)に、寓話的な小説「鞆」(安部公房)を並べた。これらの教材に「山月記」(中島敦)、「ひよこの眼」(山田詠美)を併せて全体を通して見ると、いずれも近代小説の定番と、実力ある現代作家の物語世界が並び、充実した単元構成になっている。

評論教材では、1部評論(一)に「ミロのヴィーナス」(清岡卓行)、「ホンモノのおカネの作り方」(岩井克人)、「身体像の近代化」(野村雅一)の三本を並べ充実させた。さらに評論(二)には、共に初の教材「現実と仮想」(茂木健一郎)「動物のことば・人間のことば」(野矢茂樹)を配置した。前者は(脳)科学の観点から、後者は(言語)哲学を通して(人間)存在を洞察する認識論的考察である。これら気鋭の論者による新しい評論と、「である」「ことと」「する」「こと」(丸山真男)、「場所と経験」(柄谷行人)、「無常ということ」(小林秀雄)等の既存教材を加えて一冊を通覧すると、優れた「現代文」アンソロジーができあがったと自負している。

いわさき しょういち 高校の国語教師歴二十八年。現在は東京都立国際高校で、国語とともに小論文・受験指導にあたる。